正木美術館所蔵

「一休宗純（いっきゅうそうじゅん）と森女図（しんにょず）」保存修復事業レポート②

2021 年 10 月 1 日に修復事業の開始をお知らせした「一休宗純と森女図」について、進捗状況をご報告します。

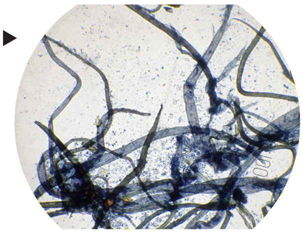
①裏面の裏打紙（うらうちがみ）を全て取り除いてみると、袈裟や畳を着色している緑青（ろくしょう）（緑色の絵具）部分に、補強のためと思われる紙が貼りつけられていました。過去に行った修理の内容がうかがえます。

◀作品の裏面です。
裏打紙を除去したため表面が透けて見えています。

取り外した裂（きれ）
風帯（ふうたい）
一文字（いちもんじ）

裏打紙を少しずつ除去している様子。▶

白っぽく見える部分が本紙の裏面です。▶
それ以外の部分には補強の紙があてられていました。



顕微鏡で見た竹紙の繊維。▶

顕微鏡で本紙や裏打ち紙の繊維を確認してみると、どちらも竹を材料にした竹紙（ちくし）であることが確認されました。竹紙は中世日本の水墨画等によく使われていた紙です。本紙の竹紙は、一般的な竹紙に比べるとかなり薄くつくられていることがわかりました。

②円窓（えんそう）を貼りつける高度な技術

一休宗純が描かれている円窓は、本紙を丸く切り抜いた上から、切り抜いた円より僅かに大きい別の円形の紙を本紙に貼付して、絵を描いています。赤外線で透過してみると本紙と円窓の紙が重なる部分がたいへん細くなっているのが確認できました。円窓の紙をごく細いのりしろで本紙に貼付するという、非常に高度で繊細な技術がうかがえます。

◀赤外線で竹紙を透過した写真。
円窓の周囲の茶色い部分が紙の重なっている部分です。

本作品は 2021 年 10 月から三菱財団の文化財保存修復事業助成を受けて、本格的な修理に着手しています。
完成は 2023 年 9 月を予定しておりますので、続報をお待ちください。

（2022 年 6 月 16 日現在）